

根

本的に理化学器械の需要を高めるためには、科学的な知識が産業振興に役立つことを広く世に訴えることとともに、産業上の新知識や具体的な科学・技術の各論の知識を普及させることが必要であった。こうした課題に対し、初代源蔵は営業のかたわら明治十九年(一八八六)七月から『理化学的工芸雑誌』を発刊する。

発刊の辞において、その目的を「本邦ノ工芸ヲシテ一層ノ進歩ヲ得セシメント欲スルニテ」とし、わが国の工芸を一層進歩発展させるためと提言している。雑誌の内容は、各々の実際の現場で生じる具体的な科学・技術上の知識や疑問を取り上げるとともに、人材育成に関する自発的・批判的言動をまとめたものであった。

雑誌発刊の祝辞を寄せた坪井仙次郎は、「工芸ノ事ニシテ正良ナル雑誌ヲ得タランニ、即チ国益増進ノ路開通シタルナリ。何人カ之ヲ喜バザランヤ」と記し、工芸についての良い雑誌を得たならば国益増進の道が開け、皆もこのことを喜ぶにちがいないと評している。

創刊号には明石博高も「農業土性弁」という論考を掲載している。明石は、「農業中土性ヲ監識スルヲ以テ農事ノ基本トス蓋シ農業上有機ノ生育ハ土性ニ因テ生息繁衰ヲ為ス常ニ視ル所ニシテ更ニ言ヲ俟サルナリ」と、農業における土壌性質の調査の重要性を指摘し、器械的・化学的な土壌試験の方法を紹介している。その他にも、創刊号の執筆者には、京都舎密局でワグネル(Gottfried Wagener)の助手として理化学分析を担当し療病院の薬局長となった上田勝行や、駒場農学校獣医学科(現、東京大学農学部)の卒業生である生駒藤太郎がおり、生駒は「動物組織論」を二七回にわたって連載している。後の号には、ワグネルの講義を翻訳した「膠製造法」や、梅治郎(二代目源蔵)の「真正の金光仮漆製法」なども掲載されている。また、島津製作所の従業員や染物講習所の生徒、後述する理化学会



『理化学的工芸雑誌』の発刊

川勝美早子

の会員、京都舎密局や医学校など、明石が創設した洋学校の出身者も多く執筆している。外国人著書の抄訳が全体の三分の一を占めており、その中には理論の紹介に加え、「アウラミン染法」「西洋線香の製法」など伝統産業の近代化を図る実践的な取り組みも見てとれる。

さらに、この雑誌で最も注目すべき点は、明治十九年(一八八六)の第五号から掲載されている「京都木屋町二條下ル理化学会」の広告である。「本会、理化学試験用器械ヲ具備シ土曜日曜ノ両日会員ヲシテ実験研究セシムルノ傍ラ諸彦ノ依頼ニ応シ左ノ業務ニ従事ス」とあり、「定性定量分析」「金石土類ノ鑑定」「理化動植物ノ質疑」「水質試験」が挙げられている。同年九月から初代源蔵は、京都府尋常師範学校金工科の教員を委嘱されており、その関係から諸学校の教員などの求めに応じて、公開実験や分析依頼、理化学講習会を行うことがあったと考えられる。またこれは、明石に払い下げられた舎密局が閉鎖となった後、その事業の一部を受け継ぐ活動であったと位置づけられる。こうした教育や産業との結びつきが、X線装置の開発など、島津製作所の企業活動の新しい分野を見出すことにつながっていったのである。

